



「こんにちは 市長です」

4月10日号

「えーっと、あれ？なんだっけ」「あれって、あれか？」「そうなんだよ。あれがあったからうまくいったよ」「良かったね」。別に誰に聞かせるわけではなくこれで2人だけの世界が出来上がる。春の暖かくなり始めたころのほんわかした光景である。田舎のあぜ道を歩く2人の老人が昔話をしている。あうんの呼吸というか、そこに漂う空気で事の成り行きを理解し合えるのである。その時の状況（空気）を共有しているということが必須条件で固有名詞は必要としない。第三者には何のことはさっぱり分からない。これほど複雑な社会でなかったからこれに近い日常はあったのだろう。言葉の数が少なかったこともゆっくりした社会を後押ししていた。「濃厚接触」「クラスター」「パンデミック」など難しい言葉たちとは遠く離れた良き？時代があった。

「あれが」とか「あぁ～思い出せない…」とか、忘れてさほど困らないならそれでいいではないか。子どもの頃には「忘れること」があってはならないと詰め込めるだけ詰め込んだ。詰め込みっぱなしではテストができない。速く答えが出せるように塾などにも行った。一夜漬けであろうと「おれは知識が頭に詰まっているぞ」と主張できなければ希望する学校には入れない。年を重ねるにつれて頭は目詰まりになって知識を放出し続けることになる。「あぁ～思い出せない」ならスマホを見ればいいわけで、むしろ頭は空き家になる。そこまでいくと「考えが飛躍しすぎる」と批判されそうだが、近い将来、頭の空白にどんな創造力を持っているかが問われる入試に変わるかもしれない。

思い出せないことに引け目を感じない、「あれとこれ」で通じるゆったりとした生活もいいな、と置いていくことの方がどんなにか幸せかもしれない。